

【講演会等報告】

佐々木史郎氏 講演会
「国立アイヌ民族博物館の展示計画」

中村和之

開催日 : 2016 (平成28) 年7月3日 (日) 16:00~17:00
開催場所 : 北海学園大学 豊平キャンパス 7号館 D31 教室
主催 : 北海道民族学会

2020年に開館が予定されている国立アイヌ民族博物館について、設立準備室主幹の佐々木史郎氏から講演があった。以下にその要旨を報告する。

2007年9月に国連で「先住民族の権利に関する国連宣言」が採択されたことを受け、2008年6月には衆議院・参議院両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が満場一致で採択された。

その後、2013年8月に『民族共生の象徴となる空間』における博物館基本構想』がとりまとめられ、2015年7

月に「国立のアイヌ文化博物館（仮称）の基本計画」が決定された。博物館設立の理念は「この博物館は、先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」とされている。

この内容の検討を深め具体化するため、2016年5月に「国立アイヌ民族博物館展示基本計画」が決定された。国立アイヌ民族博物館の展示の基本的な考え方は、「国内外の多様な人々に、アイヌの歴史や文化を正しく学び、正しく理解する機会を提供するために、アイヌの歴史・文化等を総合的・一体的に展示する」という方針のもと、以下を定めている。

- ・ともに考え、ともに育つ、未来へつながる展示交流の実現を目指す。
- ・歴史と現代の時間の流れを伝える展示を目指す。
- ・アイヌ文化の伝承者・実践者や道内外の博物館等と連携した展示体制を構築する。
- ・多様なニーズに対して訴求力のある展示を目指す。
- ・国際的な視点を持って世界に発信できる展示を目指す。



佐々木史郎氏

対象とする地域と視点は「アイヌの人々が居住してきた北海道、サハリン（樺太）、千島、本州東北地方を中心に、アイヌ文化が周辺諸地域との関わりの中で醸成されてきたことに留意した展示を行う」としているが台湾・マオリ・サーミなど世界の先住民族とのつながりも重視する。

つぎに展示の特色は、以下のようになっている。

- ・最新の情報を公開できるよう可変的な展示形態や展示システムとする。
- ・館内の解説パネルやサインは、アイヌ語、日本語、英語のほか必要に応じて多言語で対応する。
- ・ハード・ソフトの両面からユニバーサルデザインに配慮し、あらゆる人に開かれた展示環境を実現する。
- ・国内外の博物館とのネットワークを活用した展示会や巡回展を企画・実施し、象徴空間中核区域全体とも有機的なつながりを持った活動を行う。

展示の形態は、総合展示と特別展示からなり、総合展示は、「基本展示室」、「テーマ展示室」、「シアター」の各室によって構成する。基本展示室の展示は、導入展示からはじまり、「私たちの世界（信仰）」「私たちの暮らし」「私たちのしごと」「私たちの交流」「私たちのことば」「私たちの歴史」という6つのテーマを配置する。中央に目を引く展示を設け、そこを中心として各ゾーンに人を導くプラザ展示という形式を取る。

「私たちの歴史」では、対象とする時代を「旧石器時代から現代までを対象とし、周辺の人々との交流を含めた広がりの中で多面的に取り上げる」とするが、それぞれの時代は、歴史を知る材料によって区分し、以下の「核」ごとにまとめる。その際、近現代については文献史料のみならず、口頭伝承なども含むこととする。

- ・遺跡から見た私たちの歴史【考古核】
- ・アイヌとシサム【文献核】
- ・私たちのまわりが大きく動く【近現代核(1)】
- ・現在（いま）に続く、私たちの歩み【近現代核(2)】

以上のような展示への理解を促進するために、アイヌ語、日本語、英語ほかの多言語対応とするほか、音声や映像による解説装置の貸出しや、来館者自身の携帯端末等を利用した解説方法についても検討する。基本展示の資料の選定は、2016年度から実施し、展示全体の実施設計は2017年度に行うことになっている。

博物館の業務としては、このほかに調査研究、教育及び人材育成、資料の収集・保管・管理、ネットワークの形成などがあげられる。研究調査のなかには、アイヌの歴史・文化の研究とともに、博物館の機能強化のための研究がある。教育には学校教育・生涯教育についての取り組みのほかに、アイヌの人びとの学びに資することも考えている。また人材育成には、博物館の専門家としての人材の育成とともに、文化伝承者の協力を得て、文化伝承活動とも連携した活動が必要である。

国立アイヌ民族博物館は、民間の施設であるアイヌ民族博物館が国立に移行する形で設

立される。博物館が設立されることの意義は、つぎのようにまとめることができる。まず肯定的な側面であるが、以下の三つをあげることができる。第一にアイヌの人びと自身が国立の施設の運営に携わることができること、第二に中世以来「けがれ」の対象とされ、近代以降は原始、未開、非文明的と位置づけられてきたアイヌ文化が、国家・国民の文化として定義されること、第三に近代まで国家ぐるみで行われてきたアイヌ文化に対する否定的な評価が再定義されることである。一方で否定的な側面については、第一に国の文化財とされることで法律や規則に縛られること、第二に担い手であるアイヌの人々が自分たちの文化から疎外される恐れがあること、第三に和人等のアイヌ以外の人々が研究を独占してしまう恐れがあることなどがあげられる。

国立アイヌ民族博物館の斬新性は、国が先住民族の本来の居住地の中に設立する博物館であること、民族レベルでいうと、展示する側と展示される側が一体化した博物館であることである。また、以下は開館以降の仕事となるのであるが、ダンカン・キャメロンがいう「フォーラムとしての博物館」と「殿堂としての博物館」の二つの機能を両立させていく機能博物館をめざしている。

国立アイヌ民族博物館は国立民族共生公園のなかに設置されることになっている。共生公園では体験学習などの活動が予定されているが、国立アイヌ民族博物館はそことの連携をはかりながら展示、教育活動を展開することになる。また博物館の展示においてアイヌ語の方言をどう扱うか、象徴空間全体の解説をどうするかなどについては、今度取り組んでいかなければならないと考えている。

(なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校)